

5. 好きな言葉

何するにも「気合」が大事

藪内氏は「気合」の人である。インタビュー時、藪内氏が「何するにも『気合』が大事」だと言っていたのが印象深い。藪内氏の人生を振り返ると、運動神経抜群で勝気で元気発刺だった幼少時代、好奇心と気合を武器に自らの力で一人前のタオル職人に成長していった青年時代、二足の草鞋を履きながら寝る間も惜しんで仕事に明け暮れるも気合で乗り切った壮年・中年時代、そしてその後も変わらず気合で年齢を感じさせない仕事ぶりを見せている。

少々のことでは挫けない藪内氏の言葉には説得力がある。「15歳で学校を卒業して70年働いたら、そりゃ骨もスカスカになるんよね。ほやけど、生きる限りは人に負けてたまるかっていうくらいでやらんと。気合いよ。気合いよ。なんでも。」


気合で直した大ケガもある。ある日、オートバイクで請負先の玉井タオルへ出勤途中、横から自動車が衝突してきた。藪内氏は、頭を強く打ち救急車で病院に運ばれたが、しばらくは意識が戻らなかった。しかし、1週間で退院し周囲を驚かせた。後遺症として目の周りに大きなアザが残ったが、大事故から1週間後に職場に復帰した。玉井タオルに出勤すると、「あれ、藪内さん。あんた死んだって聞いたよ」と言われたので、「人を勝手に殺すな」と冗談で返したという。今では笑い話になっているが、このエピソードも気合の人を物語っている。

藪内氏は、稼いだお金で生涯をとおして2軒の家を建てた。実家の生活を支えるために15歳で社会に出た藪内氏は、働く鬼と化して寝る時間も惜しんで働いたが、苦しいとか逃げ出したいとかそうした後ろ向きの思いを抱いたことはない。藪内氏の仕事ぶりはいたって明るい。その明るさの背景には、「好き」ととことん突き詰める精神があったからである。

「好き」をとことん突き詰める

気合の先には、藪内氏の「好き」をとことん追求する、「自由さ」と「強さ」がある。細かいことを気にせず、周りの常識に流されず、「仕事が好き」だから睡眠が3～4時間でも苦にならないし、「こうした方が楽しい」から好きな服を着て仕事でも普段でもおしゃれをする。まさに豪宕俊逸ごうとうしゅんいつの人である。

仕事一筋の人生だが、とくに若い頃は大いに遊びもした。18歳で耳にピアスを開け、ミニスカートに網タイツは定番のアイテム、仕事が終わるとオートバイを乗り回した。周りの声よりも自分の心地良さを指標に前へ進んできた。これが藪内澄子という生き様である。

「飛ぶ鳥跡を濁さず」のごとき、藪内氏のこのあとの人生設計は明瞭である。3年後、檀家として世話になっている光林寺  の近くの老人ホームに入所して、亡くなったら光林寺で夫の獅子男氏と永代供養する予定である。そのための資金もきちんと準備している。「もう3年くらいしたら老人ホームに入って女番長にもなろうかしらとおもってね。90歳になったら何が起こるかわからんしね。でも、妹のことが心配やから、もう少し現役でがんばるかな。」藪内氏は、15歳から家族の面倒をずっとみてきたが、今でも10歳下の妹のことを気にかけている。妹と二人三脚で歩んできたタオル人生ゆえに、その思いは強い。妹のことを考えたら、終活にはまだ早い。

6. 好きな本

気晴らしに読む雑誌

忙しく働いてきた藪内氏は、本をゆっくり読んでいる暇もなかっ

た。今もそうである。たまに出かける美容院や、最近では腰と足に時折痛みを感じるため電気治療に通っている病院での短い待ち時間に雑誌を読む。ほんの気晴らしである。

印象に残っている雑誌は、昔よく読んだ「週刊平凡」である。同雑誌は、平凡出版（現・マガジンハウス）が1959年に創刊し、1987年の休刊までおよそ30年間つづいた週刊誌である。芸能ニュースや社会情勢、ファッションなど多岐にわたる情報を掲載していた。また、「平凡」シリーズで言えば、1966年に創刊された「平凡パンチ 女性版」もお気に入りだった。同雑誌は、短い期間での出版であったが、若い男性向け生活雑誌「平凡パンチ」の女性版として出版されたものである。とくに、流行やおしゃれに敏感な女性が好んで読んだ雑誌であり、現在の「an・an」の前身として位置づけられる。「平凡」シリーズは、時代の先端をいく若者たちのバイブルであり、一世を風靡した歴史的にも名を残す雑誌のシリーズであった。（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

愛郷同志会編「会社篇 工業の部」『四国年鑑』（昭和28年度版）、愛郷同志会、1953年、22頁。

愛媛県商工資材事務所編『愛媛県商工総覧』愛媛県商工会議所連合会、1950年、213頁。

「時代を歩く（えひめ現場ルポ）：タオル産地を支える『経通し』職人」『愛媛新聞』2021年4月18日（朝刊）。

東洋経済新報社編『完結昭和国勢総覧』東洋経済新報社、1991年。

東洋経済新報社編「週刊東洋経済臨時増刊 中国・香港・台湾進出企業総覧 1997年度版」東洋経済新報社、1996年。

森光繁編『今治商工名鑑』今治商工会議所、1958年。

編集後記

藪内さんのインタビューは、東京オリンピック・パラリンピック開催予定（新型コロナウイルス問題で延期）だった2020年の3月1日に敢行しました。世の中、新型コロナウイルスの脅威で半ばパニック状態でしたが、無事、今治市公会堂の控え室にてインタビューを終えました。当日、日本を代表する建築家・丹下健三設計による今治市公会堂で愛媛県繊維染色工業組合主催「IMABARI Color Show 2020」が開催されており、会場には1000席に1000色のインスタレーション（エマニュエル・ムホー作）が展示されていたため、藪内さんは、「自分が目立ってはいけない」と黒色を基調にコーディネートして颯爽と登場。「シック」というよりは「エレガント」。「気合」と同時に、藪内さんの「生き方」そのものを表現した個性的なオーラを感じました。



藪内さんが生まれ育ち過ごした青春時代は、現在のように多様性に寛容な時代とは違って保守的で画一的な制度や規範が社会を覆っており、「女性が起業する」なんてことは荒唐無稽な話だったとおもいます。今の時代に青春時代を過ごしていたら、松下幸之助ばりの企業家になっていたと想像するほど、藪内さんの仕事に対する気合は超凡的なものがあります。心配なのは、放っておいたら24時間体制で仕事をしかねないことです。タオルの仕事始めてからこのかた、平均睡眠が3、4時間を維持しているというから驚きですが、今治タオルの発展のために人生100年時代を生涯現役で貫いてほしいと願います。（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の28人目は、初代タオルマイスターの豊田一也氏である。戦後今治タオルの発展を技術の側面から支えたひとりであり、2019年に（株）藤高の技術顧問に就任して第一線を退いたが、現在も今治タオル技能士会のメンバーとして次世代の技術者育成にとり組んでいる。今回は豊田氏の人生を振り返りながら、戦後今治タオルの盛衰を技術者の立場から語っていただく。

